

子どもたちのこと

## 十一、ザリガニの赤ちゃん生まれたよ

### 大橋 利恵子

R子は小さな声で話をする三月生まれ4歳の女の子である。いつも周囲の子の遊びを見ていたり、一人で絵を描いたりしていて、なかなか友だちの中に入っていけなかった、食事や身のまわりのことも他の子がするのを見てからしているので、どうしても遅くなりがちの消極的な子である。そんなR子に私は、「このままではいけない。何とかして遊べるようにしなくては……」という

気持ちをいただき、何かといらぬ誘いかけをせっせとしていた。何故いらぬとつけたかと言うと、あの日「R子はこ

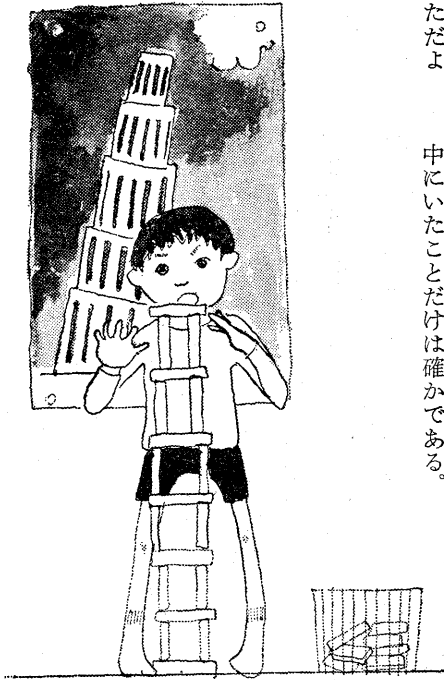
うして自分で遊んでいるんだ」と実感できることがあったからである。

当園のまわりには、まだ田畑がたくさんあり、草花や虫、カエル等小動物が子どもたちのよき遊び相手になれる環境が残っている。みんなで園外に出かけていって、それらのものをみつけたり、取ったりしてくる。特にザリガニは小さな水路にもたくさんいて、子どもたちには格好の遊び相手である。いつもバケツとたもを持ってつかまえに行くと、ほぼ一日をついやして来てしま

う。そして、つかまえてきたザリガニをタライで飼い、世話をしながら、手でつかんでみたり、歩かせたり家を作って入れてみたりして、あきずに遊んでいる。ある日、いつものようにつかまえてきたザリガニの中に、足にたまごをいっばいつけたメスがいた。さっそく一匹だけ別にしてバケツにいれ大切にしておくことになった。

誰がというわけではないけれど、毎日誰かがその小さなバケツをのぞいていた。言葉に具体的にはならなくても、みんなが楽しみにしているという雰囲気があったよ

っていた。そして、とうとう、ごく小さいメダカのような赤ちゃんがたまごから出てきたのを男の子が見つけた。(受精卵でよかった!)「生まれた、生まれた」とさわぎはだんだん広まっていきみんなが集まってきた。みんながバケツをのぞいている時に、私も夢中になって一緒にのぞいていたので、その時、R子が見ていたか、何をしていたか正確にはわからない。けれど、そのバケツの周りの輪の中にはいなかったことと、保育室の中にいたことだけは確かである。



さて、みんながひと通り見てさわぎがおさまり、バケツも定位置にもどされ、もうしばらくはそっとしておいてあげよう、ということになってから三〇分もたった時のことである。R子が、すごく目をかがやかせて「先生！」と手をひっぱる。R子の方から、こんなに元気に呼びかけられたのは初めてだったので、内心びっくりしながら「どうしたの？」と聞くと「ザリガニの赤ちゃんが生まれているよ！」と本当に今、大発見をしたということがわかる様子で言ってくれる。みんながあんなにさわいでいたのにといい気持より、R子は自分でバケツをのぞいて、赤ちゃんがいることに気づいて、いそいで報告にきてくれたのだ。あんなに何もしないで困ったと思っていた子が、自分でみつめてきたということの方に私はおどろいた。そして同時にR子が遊んでいないとか、みんなとテンポが一緒じゃないという事は問題ではないことに気づかされた。R子はR子のテンポで生活しているのだということがその時わかったのである。

以来、私のR子に対するいらぬ誘いかけはなくなっ

た。そして、R子も徐々に友だちに近づくようになり、今は唯一H子だけがR子の目標である。かけっこをするのも、食事をするのもH子と同じスピードでやろうと努力しているとお母さんからも聞かされた。H子も活発な方ではないので、こちらから見れば何とも頼りない二人組なのだけれど、R子が、自分一人の世界から、H子と共の世界に成長してきたことをうれしく思い、こうして段々にR子が成長していつてくれることを楽しみに見守っていききたいと思う。

(岐阜北幼稚園)